

中学生の保育体験学習に学ぶ

佐野 幸子

「環境による保育・教育はすばらしい。これが、今回の教育実践を通しての私の実感である。」

中学校学習指導要領の改定により、技術・家庭科の授業が男女共修となった。本校では、「木工加工」、「家庭生活」、「電気」、「食物」、「保育」および「情報基礎」の六領域について男女共修を導入したが、ここでは、第三学年における「保育」を中心にこれまでの取り組みについて報告したい。

領域「保育」の目標は、「幼児に対する理解や関心を深める」ことである。この目標を達成するためには、子育てや保育を単に教室での授業だけでなく、保育所に出かけ、幼児と直接触れ合う機会を通して、体験的に学習させることが大切であると考えられる。

最近では、核家族化・少子化が進む中で、幼児と触れ合う機会が少なくなってきた。さらに、第二自己主張期(第二反抗期)にある中学生時代は、自我を確立していく上で、極めて重要な時期でもある。この時期に保育の領域を体験的に学習することによって、幼児のことを

理解するとともに、自分がどのように生まれ育ってきたかを考えながら自己理解を深め、家族や周囲の人々の愛情に包まれて成長してきたことに気づかせ、感謝の気持ちを育てたい。また幼児への温かい心情を養い、これからの自分の生き方に目を向けさせたい。

このように、保育の体験学習が豊かな人間形成に果たす役割は大きく、男女生徒が共に保育を体験し、学び合うことに価値があると考え、平成五年度から男女共修による保育学習を導入した次第である。

〈保育指導の流れ〉

本校の三年生はハクラス、三〇九名である。生徒のきょうだい数は、二人が約五四％と断然多く、次いで三人が約二九％となっており、一人っ子が約一二％で、四人以上は五％程度である。身近に幼児と接する機会のある者は、全体の三割程度にすぎない。

保育学習は、三年生全員を対象に、事前指導等を含め、合計三五時間（一時間は五〇分）にわたり行われ

た。まず、幼児の心身の成長と発達についての基礎を学び、加えて生徒の興味や関心、意欲を高めるために「狼に育てられた子」およびVTR「さくらんぼぼうや」を教材として使用した。

実習は、本校の近くにある助任保育園（私立認可保育園）で、初夏と秋の二回、一回当り二時間、クラス単位で実施された。保育園訪問回数は、延べ一六回であった。大勢の中学生が次々と保育園を訪問したので、保育園もさぞ大変であったろうと思う。しかし、中学生の保育体験の今日的意義を熟知されている上野隆園長と全職員並びに保育者の全面的協力と支援によって、滞りなく実施することができた。

助任保育園には、一〜五歳までの幼児一二〇名が通っている。職員は一四名。広い園庭にゆったりと園舎が建てられ、閑静な住宅地と神社境内に囲まれるという自然環境にも恵まれている。児童憲章の精神に学び「地域に開かれた保育」を目指し、地域とともに歩み続けている保育園である。本校には、ここを卒園した生徒が、かなり

在籍している。

第一回目の保育実習は、園児と接して、幼児の遊び、ことば、生活などを知り、幼児に対する関心を高めるという目標のもとに行われた。実習の後、心身の発達に合った遊びについて考え、一緒に遊んだ幼児のために遊具などを製作し、これらを持参して第二回目の保育実習を実施した。

〈「さくらんぼぼうや」を視聴して〉

「さくらんぼぼうや」、保育関係者なら誰もが知っているVTR。その評価については多少意見の分かれるところであるが、それはさておき、生徒たちは、これを見てどう感じたのであろうか。ある女子生徒は次のように感想を書いている。

私は、幼いころテレビばかり見ていたように思う。自然の中で遊びまわることあまりしなかった。このビデオを見て幼い時にたくさん遊んで運動することが

大切なことを知った。自分がもう少し遊んでいたら、体力もついていたかなと思った。今は小さい子でも小学校の受験などで遊んだりする時間が少ない子がいる。そんな子たちは、かわいそうだと思う。親にもこのビデオを見せてやりたいと思う。この時期に丈夫な体と体力をつくらないと、体が弱く、病気がちで骨も弱くなると思う。

(M子)

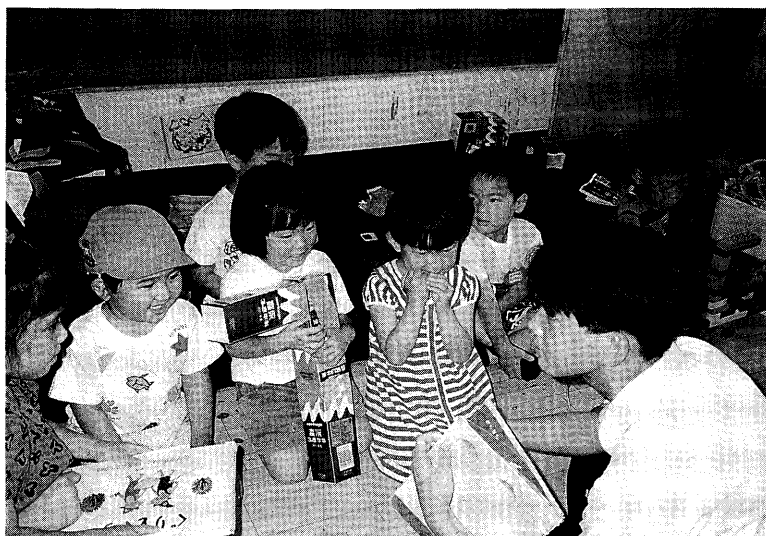
M子は、自分の幼児期の体験と現在の自分の弱さとをビデオに登場する幼児の姿と対比させながら、幼児期における遊びの重要性に気づいたようである。しかも、最近問題となっている「幼児の自由と遊びを奪ってまでの早期教育」に対して鋭い批判の目を向けている。「親にもこのビデオを見せてやりたい」という表現に今の中学生に共通する心情が込められているようだ。とにかく、保育体験学習への導入としては、ますますといったところである。

〈保育実習と遊具作り〉

いよいよ保育実習の日がやってきた。園児たちが中学生を受け入れてくれるだろうか、上手に幼児に接してくれるだろうか、幼児にけがをさせたりしないだろうか、教師としては、何かと不安であったが、園児との初対面は、思いの外スムーズであった。

おおせいのおにいちゃん、おねえちゃんの訪問を歓迎してくれたのである。これも園側の周到な準備と配慮のおかげであるが、後に上野園長らは、そのときの様子を、日本保育学会で、「実習の中学生を迎えた園児達の思わずわき上がった歓声、人見知りせず甘えて体ごとぶつかっていく純真な幼児の姿に、実習生の緊張も解きほぐされて、遊びの中で繰り広げられた大きな中学生と園児達の、のびのびとした交歓風景は、保育者保育に見られない新鮮な感動があった」と述べている。

すぐに幼児の中に入り楽しそうに童心に戻って遊ぶ生徒、うちとけるまでに時間はかかったが、幼児と一緒に遊べるようになった生徒、よちよち歩きの子の手をとつ



▶ 幼児に絵本を読んであげる

て歩く生徒、ブランコをおしてあげたりして汗だくになって一生懸命に相手をしている生徒。教師の心配をよそに、思い思いに幼児にとけこんでいった。

教室ではあまり目立たない生徒が、幼児と接するのがとても上手で、子どもたちに好かれ、生き生きとするなど、授業では発見できない場面を次々に目の当りにして、感激することしきりであった。

次は遊具作りである。その年齢にふさわしいおもちゃ、その子に合ったおもちゃ、どんなものを作れば、幼児が興味を示し、喜んで遊ぶだろうか。班ごとに話し合わせ、計画・製作させた。スムーズに作業が進んだ班もあったが、紙芝居を作るようになった班では、幼児に理解してもらえないだろうか、喜んでもらえるだろうかとストーリーを決めるのに苦労していた。また、ペープサートを製作した班は、授業中だけでは練習時間が足りなくて、ある生徒の家に集まって長時間練習していたようである。

教室の雰囲気は、いつもと違っていった。生徒たちは、

皆真剣である。目を輝かせ、ほとんどの生徒が作業に没頭していたのである。どの班も男女が協力し、役割分担を決めて意欲的に楽しく取り組んだ。

それぞれの班で製作した遊具を持参して再び保育園を訪問した。二回目でもあり、自分が作った遊具で幼児と遊ぶという目標もあるので、生徒たちははりきっていた。幼児と真剣に向かい合う生徒たちの姿に心をうたれたものである。

〈保育実習で学んだこと〉

こうした保育実習で生徒たちは、何を感じ、何を学んだのであろうか。保育園と共同で実施した意識調査や感想文などで、その一端を知ることができる。

三年間にわたる技術・家庭科の授業を生徒に振り返ってもらったところ、「保育実習が一番楽しかった」とした者が圧倒的であった。一口コメントでは、「一人一人の個性というか、感情が伝わってきたことや、三歳―四歳の子が思いやりとか人のこととかを考える事ができる

ことに驚きました」(女子)、「保育所の先生は、大変だなあと思った。母が保育所の先生なので、けっこう母も頑張っているんだと思った」(男子)、「最初、保育を学習して、何の得があるのかと思っていたが、勉強していくうちに、僕が結婚したら、役に立つだろうと思った」(男子) など、いろいろな思いを書いていた。

図1は、「保育実習をしてどうでしたか」という設問に対する回答をまとめたものである。実習した女子生徒の六五%が「とても良かった」と答え、これに「良かった」を加えると、実に九〇%強となっていた。男子生徒も、約七〇%が、保育実習を肯定的に受け入れていた。「実習して良かったことは何か」に対しては、「幼児の実態がわかった」が約六五%と最も多く、次いで、「幼児がよく懐いてくれた」約四五%、「授業だけでなく良かった」四三%となっていた。一方「実習してみてもあまり感心しなかったこと」に対しては、「時間が足りなかった」(約六五%)、「二回では物足りなかった」(約五七%)などの回答が多くなっており、この点からも、

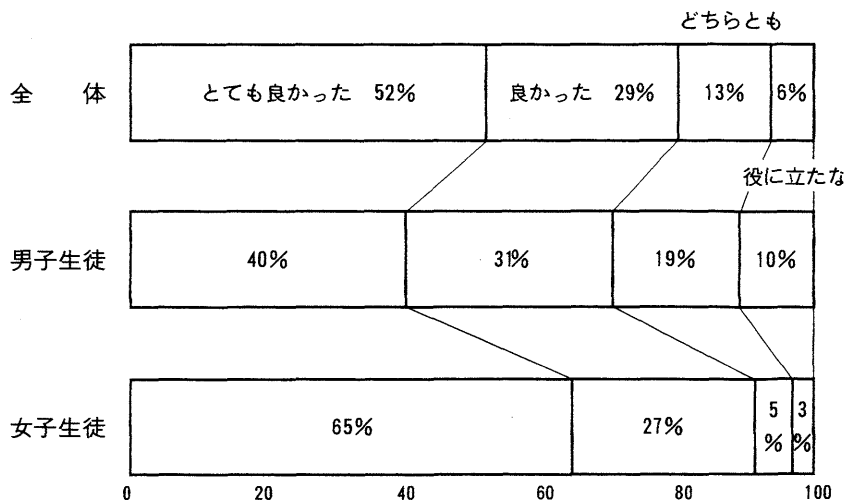


図1 保育実習に対する生徒の感想

生徒達が保育実習を楽しみ、意欲的にこれに取り組んでいたことがうかがえる（詳細は、上野ら「保育実習を体験した中学三年生の意識調査」、日本保育学会第47回大会、発表論文集、一九九四、を参照されたい）。

〈感想文にみる生徒の感動体験〉

やって来ました助任保育園。園長先生が「幼児たちの中には、うれしいことを上手に表現できずに、蹴つたりする子がいる」とおっしゃった。僕は、説明を聞いている間、期待と不安、むしろ不安がほとんどだったと思います。幼児たちと仲良くできるだろうか、嫌われたらどうしようか、ということを考えていました。

そして僕はメロン組（三歳児）に行きました。部屋に入ってから、何をすればよいのか分からずにいました。しばらくしてから本を読んであげようと思っ
て、読んであげました。本当に素直に答えてくれました。でも、飽きるのも早くて、懸命に相手をしていな

いと思いました。保育さんたちは本当に疲れるなど思いましたが、子どもが本当に好きだから苦にならないのではと思ったりもしました。

ここで僕が見て思った幼児のことについて少し書きます。様子を一言で表現すると、「十人十色」です。負けん気の強い子、絵を描くのが好きな子、強い、かっこいいことの真似を盛んにしている子、本が好き
な子、自分一人の力で頑張ろうとしている子、料理に興味を持っている子、実は甘えたい子、中でも一番印象に残ったのは、譲ることを身につけていた子です。二人の子がそれぞれに本を持って来た時、互いに一度
読んだことがある本を相手が持っていました。けんかになつたらどうしようと思っていたら、一人の子が、「そっちでいいよ」と言ってくれました。嫌々あきら
めたのではなかったので、目から鱗が落ちたような驚きと、感動を覚えました。

以前、VTRを見た時に、雪の中で手足を真っ青にして遊んでいる子どもたちがいた。子どもたちは雪の

冷たさより、遊ぶことを止められることが苦痛になる、ということを感じて覚悟があります。子どもたちの自主性や意欲を育てることを大事にするわけです。

僕は幼児たちに接して、幼児の保育の重要性を改めて感じました。保育はとても難しいと思いますが、大人になって小さい子どもの世話をするとき、十分なことはできないと思います。でも、我慢することだけではないかと思えます。保育園訪問は貴重な体験になったと思います。

(K男)

これは、男子生徒が書いた感想文(全文)である。なんとみずみずしい感受性を持っているのだろうか。幼児に向けられた優しい心と鋭い観察力、そして幼児の行動を客観的に分析する力などなど、驚かされることばかりである。こんな感想を書いた生徒が、男女を問わず、非常に多かったのである。

〈まとめにかえて〉

遅まきながら、日本の社会も「子育ては母親の責任」から「父母共育て」の時代になりつつある。また、「家庭保育至上主義」から「家庭も保育所も」という少子・核家族化時代に合った保育形態が確立されようとしている。

こうした時期に、男子と女子が、一緒になって、保育所という場で、保育を体験学習したことに特に意義を認めたい。将来、家庭を持ったとき、この経験を生かしてくれるのではないかと思う。

ところで、私自身、生徒たちが、これほど保育に感動し、意欲的になるとは考えていなかった。先の感想文でK男は、「目から鱗が落ちたような驚きと感動」と表現しているが、教師としての私もまさに同じ体験となった。最近、発表された文部省の学校基本調査の速報値でも、昨年の不登校児童・生徒数は、さらに増加し、中学生では八一名に一人の割合となっている。いじめ、校内暴力なども増加傾向にあるという。最近の中学生は、個性がない、自分の殻に閉じ込まっている、無気力で無感

動である、友だち関係が持てない、などといわれている。
る。

はたしてそうであろうか。少なくとも、半年間にわたる保育指導と保育実践の中では、そんな行動をとる生徒は、殆どいなかった。中学生は個性がないのではない。無気力・無感動ではないのだ。適切な教材と、自主的・自発的に学習しうる環境さえ用意すれば、生徒の内に潜む感性と能力を引き出し、高めることができるのではないかと痛感したのである。

新保育所保育指針の基本理念は、「環境による保育」を実施することにある。助任保育園は、その実践においても、卓越した保育園の一つである。ここでいう「環境」には、自然、遊具、保育者を初めとする人的環境などが含まれるが、中学校における技術・家庭科の学習に際しても、基本的には同じことがあてはまると思う。力量不足ではあるが、「生徒に学び、生徒の内面に響く、そして生徒の思考をくぐる教育」に少しでも近づける教師を目指したいと思う。こうした機会を提供下さった園

児たち、先生方、そして本校の生徒達に感謝の気持ちで
いっばいである。

(徳島市立徳島中学校教諭)

